

吉井源太と明治

《34》

内国勸業博で名誉賞

明治二十三（一八九〇）年に第三回内国勸業博覧会が東京上野で開催された。

この時吉井源太は名誉賞を授与されることになるのだが、日記には、この前後に尋ねた場所、出会った人、そしていろいろな用事などが、細かく記されている。

源太は、六月四日に船で出発して神戸に着き、翌日大阪から汽車で京都へ出て用事を済ませる。その後伊勢神宮参拝に向う。朝熊山にも登る。伊勢に参って、ここに行かなければ片参りだと言われる場所だ。その道に雁皮やノリウツギがたくさんあることも見て登った。このあとは船で豊橋に出て、ここから汽車に乗り、東京に向かう。東京では早速博覧会場を

見物し、その合間に大蔵省印刷局長や抄紙部長、そして抄紙部の官員たちに出会う。印刷局には抄紙部の他に刷版、製肉（印肉）、彫刻、押印といった、紙幣製造にかかわる諸部門があり、それらの各工場を見学させてもらったらしい。

印刷局は、紙幣を作るという役目上、大変厳密な秘密保持が要求されるところで、工場には大でさえ入れてもらえなかったという。源太への信頼性がうかがえる。

その後、何度か抄紙部に行って色々な人と話をし、楮の押し葉十一種を製作して送ることを引き受けた。これは源太が高知へ帰ってから、ほどなく抄紙部へ送られた。

この合い間に「西野文太郎墓を見る」という記述がある。これは、初代文部大臣であった森有礼を刺殺、

その場で斬り殺された元長郎藩士の墓だ。源太が墓を訪れた前年二月十一日のことで、森が明



源太がいつも携えた旅行かばん
(いの町指定文化財、吉井家所蔵)

治帝国憲法発布式に参列するために官邸を出ようとしていたところの事件だったという。啓蒙思想を進めようとしていた森に反感を感じての犯行だったらしい。

源太にとっては、つい最近のことであり、事件についても色々耳にしていたことだろう。この時源太がどのように思ったのか、日記からはわからないが、名所とはいえない場所をわざわざ訪れたということ

は、関心があったのだと思われる。

このような日々を約一月過ぎしなから、名誉賞の授賞式に臨み、それが済むと汽車で静岡へ向かった。ここは、二年前からおいの吉井寅之助が製紙教師として働いていた場所だ。

浜松から北へ二十キほど

のところにある、阿多古という村。天竜川の支流、阿多古川沿いにある、阿多古和紙の産地だ。ここで、阿多古川が天竜川と合流するところにある二俣で製紙場を巡回した。ここでも多くの製紙関係者と交流した。

このあとは浜松から汽車で神戸へ、そして、船で高知へ帰った。日記にはこの旅での金銭出納の記録も書きとめられている。馬車や人力車という交通費の記録が多いが、身近な食品代について、少し書き出してみよう。主に汽車での移動中の買物のようだ。

瓜 六錢三厘 昼飯
六錢 茶代 四錢 ラ
ムネ 三錢 弁当 十八錢
(京大大学院研修員、京都府在住)